

1999年の本。

私たちはおかねの社会でくらしていますが、いつも頭の中でおかねのことを考えているわけではないでしょう。それなら、あまりおかねの社会にふり回されずに生きてると、言えるでしょうか。とても、そうは言えないのです。

**おかねの社会**とは、悪がしこいことをしたり、まわりの人たちをつき落ととしても、**おかねをもうけた人が勝ち**だという社会です。こういう社会では、おかねのことにかぎらず、すべての面で、勝った人が偉く、負けた人はダメな人だという雰囲気がつくられてきます。学校の中でも、そうでしょう。成績のよい人が偉い人、悪い人はダメな人という雰囲気があるでしょう。

こういう雰囲気ができてしまうと、強い人と弱い人、偉い人とダメな人、勝った人と負けた人というように、単純な基準で、人間を評価する社会になってしまいます。本当は、人間にはもっとさまざまな能力があって、人それぞれに、すぐれた面があるのに。

それにこういう社会では、他人に勝つために、他人よりすぐれていると評価されるために、私たちは一生競争をしつづけなければならなくなってきます。でも、**他人との競争に勝つことが、本当に人間的なこと**なのでしょうか。逆に**助け合いながら生きる方が、よほど人間的な**のではないのでしょうか。

たとえば、とても良い物をつくることのできる人がいたとしましょう。ところが、いまの社会では、どんなに良い物でも、それが**売れなければ価値がない**ことになってしまいます。ですから、だれでもが売れそうな物をつくるようになります。流行している物とか、質は悪くても安く売れそうな物とか。

でも、こういうことばかりしていると、売れる物なら何でもいいというような考えを持つ人がでてきたりして、本当に**良い物をつくらうとする人は少なくな**ってくるでしょう。

②総合的な学習の時間においては、次のようなねらいをもって指導をおこなうものとする。

- (1)自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
- (2)学び方やものの考え方を身につけ、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。

「だって……」は、「だって、だってって、言い訳はいけません」というのが、子どものしつけの基本のようになっている言葉です。「だって」は「自分の主張を正当であると抗弁するとき用いる」(福武国語辞典) 接続詞です。言い訳するための、足がかりになる言葉です。ところで、言い訳ってそんなに悪いことでしょうか。たしかに言い訳がましい大人はただけませんが、でも言い訳つまり抗弁がきちんとできるのは、ものすごく大事なことでは

ありませんか。今、それがとても大切になってきています。おカネを稼ぐにも使うのにも動かすのにも、抗弁できる力は欠かせません。

だから、「だって……」の後に何を言うのかを聞くのは、とても必要で大事なことです。「だってって言ってはいけません」と言葉を切ることで、じつは自分の言いたいことを組み立てて主張する機会をも切り捨ててしまっているのです。

「しつけをしっかりやる」と

言えば、子どもが親のしつけどおりに動くことと思っている親も多いのではないのでしょうか。そんな状態の子どもは、自律的な判断や行動をする力を育て損ないかねません。外からの指図や影響力に依存しやすい人に育つことが心配、ということです。

しつけとは、子どもを親が望むような形に仕上げる親による「教育」なのではなく、子どもが自分をつくり育てていくときの指針とか原型とかを提供していくことではないか、ということになります。

日本の金銭教育は、「勤儉貯蓄」の四文字で済んでいました。